

日本洋書協会会報

Vol. 34 No. 6 (通巻397号) 2000年6月

2000年度定時総会

2000年度定時総会は5月19日午後3時30分より箱根湯本・ホテル河鹿荘で開催された。

〔出席状況〕	出席	32社
	委任状	37社
	計	69社

正会員77社に対して過半数の出席を得たので、協会規約第5条第30条に基づき総会は成立した。1999年度中に正会員2社、賛助会員6社の入会、正会員4社の退会があったことが事務局長より報告された。

鈴木理事長の開会挨拶に続き、渡辺副理事長の理事長活動全般の報告、金原理事より「日本複写権センターと米国 CCC との交渉経過」、田村理事代理より「関西業界事情」について報告、更に各委員会委員長より委員会活動報告と新年度の活動計画の発表があった。特にダイレクティブ委員会・山川委員長からは開設間近の協会ホームページについて、パワーポイントを使った説明があ

った。

議案審議

【1999年度決算報告】

西川総務委員長の内容説明の後、沼尻監事（三省堂）及び平岩監事（アカデミア・ミュージック）より監査報告があり、採決の結果1999年度決算は可決・承認された。

【2000年度予算報告】

西川総務委員長の内容説明の後、採決の結果2000年度予算案は可決・承認された。

以上ですべての議事を終了し、中林理事の閉会の挨拶を経て2000年度定時総会を閉幕した。

なお、今年は3年ぶりに旅行会を併催し、29社42名が参加した。



目次

2000年度定時総会報告	1	うちの会社ほか	3	日本の中の英国村	6・7
委員会報告ほか	2	新・パソコン外論考(其6)	4	広告	8
		出版文化史逍遥	5		

第95回72会ゴルフコンペ

天城にっかつゴルフ倶楽部

2000・4・15 (土)

前日からの予報通り、生憎の雨。72会のコンペでは本日に何年か振りの雨の中でのプレーとなりましたが、風も無く、暑くも寒くも無く、又、雨も小降りになったり、止んだりとまらずのコンディションでした。斎藤さん(UPS)が理事をされている天城にっかつゴルフ倶楽部のホテルに昨年同様、前日より泊まり掛けでゆっくり温泉に浸かったり、夕食、カラオケを楽しまれた方も多かったようです。雨で山は見えませんでしたが、未だ桜が残り、緑鮮やかな樹木に囲まれた丘陵コースの松見・富士見コースをカートに乗って、総勢6組24名の参加で賑やかなコンペになりました。

優勝は「久々にいいゴルフが出来て良かった。」と丸善の宮川さん。2位は「パットが良かった。」初参加の斎藤一明さん(タトル商会)。50/53とスコアが一段と安定して来た楠本さんが見事3位入賞。

天候の心配もあって昼休みもとらず、一気にラウンド。プレー後のパーティは昼食を兼ねて大盛況でした。表彰式、入賞の方々のスピーチ、そして、斎藤さん(UPS)の「緑がいい、空気がいい、水がいい、和気あいのゴルフが楽しめた」とのスピーチが此の日参加の皆さんも同じ気持ちだったようで、頷き拍手、談笑のうちにお開きとなりました。

成績表	G	HC	NET
優勝 宮川 修 (丸善)	91	21	70
2位 斎藤一明 (タトル商会)	98	24	74
3位 楠本 忍 (タトル商会)	103	28	75
4位 松浦拓己 (丸善)	91	14	77

5位 金原 優 (医学書院) 88 10 78
 ベストグロス 斎藤純生 (UPS) 83
 ドラコン 鶴竜次 (東亜ブック) 川原孝人 (UPS)
 斎藤純生 (UPS) 和田茂 (大洋交易)
 ニアピン 鶴三郎 (東亜ブック) 久住多賀子 (ゲ-テ書房)
 細川政敏 (UPS) 戎井忍治 (丸善)

(HN記)

フォーティラブ結成25周年を迎えて

1999年度は3月4日の湯河原でのテニス(みかん狩りもありました。)&温泉(檜の露天風呂は最高でした。)の5回目の合宿で幕を閉じましたが、おかげさまで延べ120名の皆様に参加していただきました。1年間を通してテニスをすることによっていろんな方と出会い、体を動かすことがこんなに楽しいものだと思えてきました。2000年度は1回目として4月8日に津久井湖での花見合宿、とにかく桜が満開で暖かい日差しの中より一層テニスを楽しむことができたかと思えます。

今年は冒頭にもありますようにフォーティラブ結成25周年ということで秋合宿(9~10月)に盛大にパーティーなど企画しております。今後は7月~8月に夏合宿、秋合宿、12月~3月に湯河原温泉合宿を予定しております。テニスをやってみたい方、テニスに興味のある方(初心者の方でも楽しめるよう親切丁寧に教えていただける方がたくさんいますのでご安心を)また、久しぶりに体を動かしてみたい方、是非フォーティラブのテニス合宿に参加されてはいかがでしょうか。もちろんテニスの後はおいしい食事とお酒?が待ってますので、多数のご参加心よりお待ちしております。

フォーティラブ幹事 鶴 竜次 (東亜ブック)

〈お詫びと訂正〉

Invitation to JAIP に以下の誤植がありました。謹んでお詫びし訂正します。 【広報渉外委員会】

〔誤〕 株式会社 誠堂書店
 〔正〕 株式会社 成堂書店

JAIP DIRECTORY 2000 に以下の誤植がありました。謹んでお詫びし訂正します。

【ダイレクター委員会】

株式会社 トーハン
 会長ご氏名 〔誤〕 Hiromasa Koutaki
 (ローマ字) 〔正〕 Hirotada Koutaki

株式会社 雄松堂書店

東京都新宿区三栄町29

Tel : 03-3357-1411 Fax : 03-3351-5855

6月9日日経新聞主催の“アジアの未来”に関するシンポジウムが帝国ホテルで開かれ参加いたしました。マレーシアのマハティール首相が、20世紀後半欧米先進諸国の経済的な強い影響をうけて日本を含むアジア諸国が成長し、アジアの未来をアジア人自身で語れる様になったことを十分認めた上で「私達の文化の独自性を失ってはならないし、欧米化が唯一の成長の原動力になってはならない。受信から発信の時代へ」と持論を展開されました。

私は幸い1950年代の終わりにアメリカに半年ほど滞在するチャンスを得ました。そこで日米の研究機関や図書館の質量両面の違い、差のようなものを感じて帰国し、自分の青春を学術書の輸入というビジネスに賭けることにしたのは1960年の2月です。社名は父が戦前神保町の古書店として昭和7年に創業し、戦争で中断していた“雄松堂”を使うことにしました。“YUSHODO”は外国人からみるとラテン語のようで力強く感ずるそうです。今私の下で役員として経営の中心的役割を担ってくれている人達は当時私の下で未来を賭けてくれた仲間のようなものです。

スタートの段階で私達の“教育産業”は必ず成長する、亡びないということを前提にしました。社会全体が大きくなること、強くなることを指向した時代に、「大企業になるより良い企業になろう」を社のモット

ーにしたのは、今からみれば生意気な強がりだったと思っています。私自身はこの40年意図的に多様な人達とおつき合いし友を持つことに心掛けて来ました。雄松堂がこの間企画し事業として展開したことの多くは、種々な分野の人達からの情報やアドバイス、協力のおかげと思っています。

前に述べたように受身で受信型の仲介業型ビジネスは新しい時代に生き残れないような気がしますが、雄松堂は21世紀戦略を“グローバル化、発信化の促進”を経営の原点とするつもりです。私自身も健康の許す限りお客様は勿論、一人でも多くの人に会いお話を聞いて、21世紀に企業の存在価値を社員全員が実感出来るように明るく生きていこうと思っています。最後に、去る2月1日会社創立40周年の記念に関係各位に発信した私共の英文のメッセージは次の通りです。

In commemoration of our 40th year as a Limited Company and as a book importer at Yotsuya.

In our specialist areas, we have always aimed to be not only the best firm in Japan but also the foremost leader in the world.

February 1st, 2000 Yushodo Group of Companies

新田満夫

＜お詫びと訂正＞

JAIP DIRECTORY 2000 に以下の誤植がありました。謹んでお詫びし訂正します。【ダイレクター委員会】

ビューローホソヤ 取扱分野

〔誤〕

LES BRILLES LETTERS
EDITIONS CHAIRES DART
GROUPEHATIER INTERNATIONAL
L'ECOLE DES LOISIRIS

INTER FORUM (Albin Michal...)

E-mail〔新設〕

〔正〕

LES BELLES LETTRES
EDITIONS CHAIERS D'ART
GROUPE HATIER INTERNATIONAL
L'ECOLE DES LOISIRS

() 内削除

brhosoya@poplar.ocn.ne.jp

新・パソコン外論考(其6)

宇田川一彦 Udagawa Kazuhiko

◆I was doing all right./何の心配もなく、うまくいっていたのに…

子曰、…、六十而耳順、

The Master said, "At sixty my ear was attuned."

(論語/為政・Confucius; The Analects/Book II)

【超拙意訳；先生はいわれた。「私の自叙伝は、簡単に言えば、六十歳になって、自説と異なる説を聞いても、むやみに反発してやろうとは感じなくなったよ。いわば、『耳に順(なら)う』というやつで、いろんな説にもそれなりに存在理由があるのだ、ということだね」

【外注；この『耳に順う』というのは、たいへん難解な言葉です。英訳も attuned としましたが、adjust でもいいかなと思いましたが…】

★Internet 関係のパソコン英語***** (2)

最近、Internet (単純に the Net というのが一般的) がらみ、音楽著作権不正コピーがらみで飛び交っているパソコン英単語があります。

【MP3】と昨夏頃からしたナップスター社および同社の NAPSTAR (MP3 専用ファイル交換ソフト) 問題。さらに、音楽著作権のみならず「著作権」そのものも「なし」にしてしまう、正にパンドラの匣が開いたような Daimajin ソフト GNUTELLA、G がサイレントの《ヌー》と発音しないで《グヌーテラ》の出現です。この項目は後稿で機会があればとりあげます。

この【MP3】= [MPEG-1 Audio Layer III の俗称=MPEG 音響階層 III (階層は I から III まであります)] は、音声圧縮技術およびこれで作成された音声ファイルのことを指します。Net 関係でみれば、この MP3 規格は、いままで大容量音楽データを音質を劣化させないで圧縮し、送受信することが出来るようになりました。ここから、冒頭の会社の台頭、音楽著作権と絡むわけです。

で、【MPEG】、Moving Picture Experts Group= 動画音声(圧縮) 専門家開発作業グループの意味です。

閑話休題。

最近、友人・知人(企業勤務も含む) からいただく名刺には、電話・ファクシミリの後に、小さな字で【E-mail】= [Electronic Mail=電子メール、決して

Electric Mail 電気メールではありません] や【Web site】のアドレスを印字したものが多くなりました。

例えば、次のような E-mail のアドレスがあります。

【suzukiky@nifty.ne.jp】→

【suzukiky】は、user name (使用者名) といいます。

【@】は、at/at sign。at-mark といいます。情報交換用符号の記号です。通常は、ご存知の通り商品等の「単価」を表すものです。

【nifty.ne.jp】は、domain name (領域名)=そのまま、ドメインネームとして使用。主に国や組織などの領域名によってグループに分けられています(ただし、Win-NT などの OS での Net 関係用語としてはちょっと違う意味あいがありますが言及しません)。Net の発祥国アメリカでは、この部分の扱いが少し違います。

例えば、【america.net】を [top level domain=第一水準領域] といいます。国名は不要です(ただ、us という国名コードもあります)。

で、【nifty.ne.jp】場合、top level domain は、当然 jp=japan の部分のみで、その左側にある【ne.】の部分が second level domain になります。この nifty.ne の例は [nifty 社ネットワークサービス (プロバイダー)] の領域名となります。

そこで、日本の second level domain を少しあげておきます。友人知人先輩後輩取引先企業人の方々から貰った E-mail の識別名の判読の一助に…。

【ad ADministration=ネットワークの管理組織】

【ne NETwork=ネットワークサービス】

【ed EDucation=教育機関、ただし高校以下の】

【ac ACademic=教育および学術機関、大学など】

【go GOvernment=政府機関】

【gr GRoup=各種団体、ただし法人格なしの】

【co COmpany=商業法人=会社】

【or ORganization=非商業法人】

アメリカの場合の主な top level domain には、

【com COMmercial=商用会社】

【gov GOVERNment=政府機関】

【edu EDUcation=教育機関】

【net NETwork=ネットワーク】

【org non-profit ORGanization=非営利組織】

などがあります。

紙数が尽きました。前回約束いたしました [WWW] とか [HTML] は次回で…。 (次号へ、乞御期待)

明治初期の目録に見る洋書〔16〕

丸善・本の図書館 鈴木陽二

◆明治16年洋書目録に見る輸入の状況(8)

明治16年洋書目録の内容瞥見を続ける。“Shibata, M. & Koyasu, T. -An English and Japanese Dictionary.”(柴田昌吉・子安峻『増補訂正 英和字彙』)は明治15年に横浜の日就社から刊行された。以下、早川先生のご著書によって紹介してみたい。この辞書の初版は明治6年に刊行され、最初の本格的な英和辞典と称された『附音挿図 英和字彙』であった。このころはまだ木版刷りが主流を占めていた中で活版印刷で行うことを決め、明治3年に横浜の弁天町に「日就社」という会社を創立して本木昌造が造った鉛活字を購入し、上海から印刷機と英文活字を入手したうえ、西洋人を雇って印刷工を養成したという。最初の活版印刷辞書ではないが、活版印刷の長所を生かして当時としては異例の5千部という大量の部数を発行し、そのうち2千部は政府が買い上げるなど、優れた辞書として普及した。ちなみに、最初の洋装活版本(訳語は木版)は文久2年に幕府の「洋書調所」で刊行した『英和对訳袖珍辞書』であった。

この『附音挿図』はオウグルビーの辞書類を参照して編纂された。ウィリアム・オウグルビーはズコットランドの出自であり、またこの辞書を出版したのはグラスゴウ所在の“Blackie & Son”であることから、オウグルビーの辞書はジョンソンの流れを汲むイングランド系の辞書とは違って、チェンバーズやブリタニカなど百科事典が育った風土のなかで生まれたもので、多分に百科事典的な色彩が強いといえる。例えば科学技術の専門用語が豊富なこと、英米辞書としては初めて挿絵を本格的に収録したことなどが、特徴の一端といえる。

オウグルビーを参照した関係で、柴田・子安の辞書は当然のことに百科事典的な性格をもち、専門用語や西洋の事物に関する語彙に力点がおかれ、また約500の挿絵が本文中に、あるいは付録として収録されている。もっとも、挿絵に関してはウェブスターなども使用したようである。ともあれ、こうして明治6年の初版で55,000語(当時最大)、明治15年の改訂第2版ではさらに1万語を追加した(挿絵は100追加)、明治初期の代表的な英和辞書が生まれたのであった。

子安峻は、明治7年にこの辞書出版の資材を使用して『読売新聞』を発行して初代社長に就任した。〔参照文献:早川勇『初期英和辞典の編纂法』/惣郷正明編『目で見ると明治の辞書』〕

“Lobscheid, W. -English and Chinese Dictionary, Punti and Mandarin Pronunciation” (4 vols.) (ロプシャイト『英華字典』)は英和辞書ではないが、明治初期の英和辞書編纂にきわめて大きな影響を与えた。1866年から1869年にかけて香港で印刷され、英語辞書の少なかった明治初期に英学者に広く使用された。その後も修訂版が継続され、明治12年には津田仙(津田梅子の父)など3名による共訳で中村敬介(正直)校正『英華和訳字典』が、明治13年には自由民権家で著名な大井憲太郎がロプシャイトに準拠して編纂した『独仏増補英華字典』を刊行し、明治17年には井上哲次郎が訂正増補したロプステード原著『訂増 英華字典』が刊行され、明治31年にはそれに正誤表を付けた再版が発行された。

日本の英和辞書で特にこの辞書に大きな影響を受けたのは、『附音挿図 英和字彙』であった。同辞書は上述の通りオウグルビーの辞書によって収録語彙を決定しているが、見出し語の日本語意味表示は『英華字典』を大巾に参照した。特に熟語の訳に多用したようである。

日本における学術関係の訳語、その中でも思想関係の訳語の多くを西周が造語したことは知られているが、この『英華字典』が近代以降の日本の漢語的な用語・表現の確立に大いに影響を与えたといわれ、その面でもきわめて重要な辞書であったと見ることができる。〔参照文献:早川勇『初期英和辞典の編纂法』/永島大典『蘭和・英和辞書発達史』〕

近代日本の海外文化摂取の中で特に大きな役割を担った出版物の輸入について、丸善の明治9年と明治16年の洋書目録によって思いつくままに解説を試みた。これ以降も明治前半期の洋書目録がいくつか残存しており、それを分析するのも洋書輸入史検証の上で参考になると思うが、ここでひとまず筆をおくことにしたい。

日本の中の英国村

島岡 丘

「British Hills はイギリスの雰囲気そのものでとてもいいところですよ。学生にもきっと喜ばれますよ。」と OUP の方から情報をいただいた。私自身も長年教員をしていて感じていたのは、学生に英語を実際に体験させ、英語の必要性を肌で感じさせなければ、英語を自分のものにしようという意欲も高まらないと思っていたので、この話を伺って是非学生を連れて行こうという気持ちになった。

大学の授業ではとかく一方通行になる。日本の文化的背景が関係するのだろうが、学生は教師よりも身分を下に置こうとして、指名されないと発言してはいけないと決め込んでいることが多い。さらに各学生が豊かにもっている持ち味を表に出し、クラスの他の学生と「分かち合う」という気持ちがまるで薄いのである。「知ったかぶりをして」とか、「かっこつけやがって」と言われるのが怖いらしい。学生は「能力も平等であるべきだ」という理不尽なことまで考えがちである。高い授業料を払って大学に入学し、よい仲間と一緒にいるのに、与えられた環境を自分のために活用していない学生が少なくないのは残念なことである。

学生に対して、このような不平・不満をいうだけでなく、何とか解決の道を見つけてやるのが教師の役割であるから、授業外に学生に接することをすすめている。ALT（英語授業補助者）のうちで、教室外でよく生徒たちに接し、話しかけるものは授業も効果的に行われているように思う。少数の学生でも、直接接し、炉辺談話風に英語で話し合うという English Table Talk (ETT) という時間を設けてみたが、毎週1回ずつ続けているうちに参加者が増え、ついに The British Hills、英国村へ行こうということになった。学生25名と私を含め教員3名（うち1名がアメリカ人教授）がチャーターした地元のパスで3時間かけて1泊2日の予定で出かけた。学生のなかにもイギリス人2名、中国人1名おり、英語が共通語ということになった。

福島県の新白河から山に30分ほど入るのだが、建物はすべて英国風で案内の人はスコットランド風のキルトを身に纏っている。アメリカ人やオーストラリア人が1、2名いたが、ほかはすべてイギリス人である。到着する

と afternoon tea が待っていた。イギリス風のパンである scone を二つに割ってバターをつけて食べるのであるが、ティーを入れる茶碗もほかの調度品もイギリスのものである。「イギリスよりもイギリス的」と言われるほど徹底してイギリスの雰囲気を出している。

簡単なオリエンテーションを受けた後はまったく参加者の自由である。専属の講師による授業を2、3受講させることとし、あとは自由時間を多くとった。プールで泳ぐこともできるし、テニス、卓球、バドミントンなどのスポーツ施設もあり、さらに英国風のパブもある。また、ハイキングもできるようになっており、10分ばかり歩けば湖を見下ろせるすばらしい眺めが楽しめるところに着く。海拔1000メートルのところだそうで、大気も澄んでおり、すがすがしい気分になる。6月の第1週の週末で天候にたいへん恵まれた。

宿泊施設もイギリス風であり、Chaucer などイギリスの文人の名前を宿泊の建物につけている。各部屋の調度品も英国風で、特にバスが豪華で、イギリスの貴族になった気分を味わわせてくれる。

食事はオックスフォードの学寮などにあるような細かいテーブルに向かい合って座る。ディナーの時はフォーマル・ウェアが求められる。ウェイトレスはイギリス人で、食事の注文はすべて英語で行われる。

翌朝のレッスンに選んだのはプレゼンテーションの仕方という極めて実用的なものであった。講師はその方面の経験豊かな人で、5分間の準備をせよ、そのうちの2分間には5つのキーワードを書き出せ、後の2分間はそのキーワードの配列を考えよ、あとの1分で口を動かして (mumble) みよ、と指示した。学生はそうにやっていたところ極めて上手にできた。指導によって学生もずいぶん伸びるものであると感じた。

私は同行した同僚の教授の黒人作家に勧められて aromatherapy というレッスンを受講した。様々な野草からそれぞれのエキスを抽出してそれを健康回復などに用いる歴史はエジプトや中国が起源ですでに5000年の歴史があるそうである。講師はまだ若い30代の女性だったが、実に分かりやすく薬草について詳しく説明してくれた。10種類の抽出液 (essential oil) を鼻で嗅ぎ分けることは至難の業だったが、興味深く教えてくれた。抽出液は rose, lavender, chamomile, sanderwood, peppermint, geranium, rosemary, bergamont など一度に覚えることはできなかったが、英語を通して

herb doctor になったような気分を味わった。

最後は私の担当したクラスであるが、まず総ざらいした後、最初の文を与え、そのいい方を様々に工夫させた。The British Hills was a good experience for me. がその文であるが、good に力を入れた場合と、me に力を入れた場合とでは聞き手にはまるで違ったメッセージを伝えることになることを教えた。参加者の中には英語に自分の感情を入れてスピーチするのは初めての経験であるという学生もいたが、一人5分ずつのスピーチが例外なく進歩していたことを知って教師の喜びを感じた。

その時、日本の英語教育が国際比較でよい成績をおさめない理由が分かったような気がした、日本の英語の授業では英語の文章が日本語に直すための対象物であるという暗黙の了解があるようだが、これでは実用に役立つ英語にはならないし、脳の動きも活性化しない。教科書は日本語に直して理解するものでないことは現行の中学の教科書を開くと明らかになる。私の関係している教科書では、常に誰が誰に対して語ったかを明らかにしている。例えば主人公の一人、Emily Brown がホームステイ先の友達久美に連れられて教室で自己紹介する際も次のように語っている。

Emily: Hello. My name is Emily Brown.

I am from New York.

I like music very much.

I play the piano.

—Sunshine English 1, p. 16

学生に日本語で自己紹介をやらせると、「私はだれだれです。よろしくお願ひします。」で終わってしまうことが多い。英語には日本語の「よろしく」にあたる表現がない。これは日本は依存的社会であるのに対して英語圏は独立個性的な社会というせいもあるだろう。英語で自己紹介をする場合、上記のように、名前、出身地、自分の得意技か好みの3つが最低限必要である。

日本人の英語表現力を高め、将来国際的に活躍してもらおうよという財界からの要請で今から30年ほど前に東京大学の茅誠司総長、同理学部長坪井忠治教授、京都大学の岩村忍教授、東京教育大学の入江由起夫教授、ICUの斎藤美津子教授ほかが中心になって財団法人COLTD (Council of Language Teaching Development) を結成し夏休みなどを使って ITC (Intensive Training Course) を実施したことがあった。最初の年は全国の40の大学が参加し、その翌年は42の大学が参加

した。残念ながらオイルショック (oil crisis) が日本を襲ったため、財政的なゆとりが無くなり、その全国的な計画は頓挫してしまっただが、東京教育大学 (筑波大学の前身) など若干の大学では安い金額で滞在できる研修所を利用してその英語強化合宿訓練を実施していた。強化合宿中の守る条件は英語の母語話者を常駐させ授業以外でも英語を話させることと期間中日本語を禁止することであった。強化合宿を行うことになったのは当時東京工業大学教授で社会学の専門であった永井道雄教授は日本人に英語のコミュニケーション力をつけるには母語話者を合宿させて、心理的障害 (psychological barrier) を排除することが第一であるという提言を受けていたからである。

ITC に参加した学生たちのうち、筑波大学の学生はこの英語合宿中に鍛えた英語力を維持するために ITC を International Talking Club としてクラブ活動として登録し、現在に至っている。大学生の英語コミュニケーション力をつけようと協力してくれた40人ばかりの大学教員はその後どうなったのだろうか。定年になってしまった教員もいるだろうが、私よりもひとまわり年上の人もまだ現役で働いている人もいる。よいことはやはりよいのであつて、ETT のような活動の輪が広がると楽しい思い出となるキャンパスライフが生まれるのだが。大学には ESS という団体があるが、大学対抗 debate の試合などがあるそうだ。しかし、そのような公式な面だけでなく、あたかも暖炉の周りに座つて英語を気楽に話し合う機会があつてもよい。英語は学習するだけでなく、何か目的活動をしているうちに英語力がついてくるというのが本来の姿かもしれない。私自身の経験ではサンフランシスコ州立大学の名誉教授の John Dennis さんは3日間にわたつてのべ20時間ほど話し合ったこともあれば、UCLA の言語学教授たちと Peter Ladefoged 教授宅のプールの周りに座つて井戸端会議のようなものを楽しんだこともあつた。学生と共にいった英語強化合宿がこんな時にも役立った。

パソコンの前に座つて過ごす時間が一般に増えたようだが、やはり人間はことばを実際に使って意見や情感を交流するように運命づけられているのだろうか。

(茨城キリスト教大学教授)

The Cochrane Library

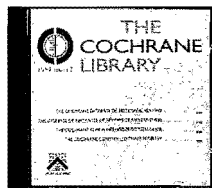
このCD-ROM (The Cochrane Library) は、コクラン共同計画の主たるアウトカムであり、エビデンスに基づく医療 (evidence-based medicine) の情報インフラストラクチャーとなるものである。

コクラン共同計画は1992年にイギリスでスタートした医療技術評価の世界的プロジェクトであり、1,400件を越すレビューが完成または進行している。医学のあらゆる分野のシステマティック・レビュー、すなわち、ランダム化比較試験 (RCT) を世界中から収集し、質評価とメタアナリシスを行い、3ヵ月ごとに更新して届けるというものである。また、現在、世界に15ヵ所のコクランセンターがある。

それらの仕事をまとめたものが「The Cochrane Library」である。3ヵ月ごとに最新版が発行され、最新の情報が届けられる。このライブラリーには以下のデータベースが含まれる。1) CDSR: コクラン共同計画による各トピックごとのレビュー (メタアナリシスのグラフなど)、2) CENTRAL: 世界中のRCTのリスト (MEDLINEなどの中のRCTを含む)、3) 他の研究者やグループによるレビューのリストとアブストラクト、などである。

このCD-ROMによってコクラン共同計画の全体像が把握でき、また最新のエビデンス (科学的根拠) に基づく医療が可能となる。

年4回アップデート。



●年間購読価 (税別)	
CD-ROM <Windowsのみ>	Internet <Windows & Mac>
¥ 36,000 (個人)	¥ 40,000 (個人)
¥ 48,000 (団体)	¥ 80,000 (団体 - Single user)
¥ 94,000 (2-5 Network license)	¥ 96,000 (2 Network license)
¥128,000 (6-10 Network license)	¥112,000 (3 Network license)

(その他の価格につきましては南江堂洋書部までお問い合わせください)

Best Evidence 4

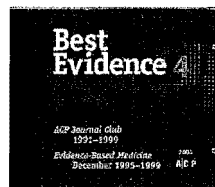
Linking Medical Research to Practice

2000

ACP Journal Club 1991-99の9年分と Evidence-Based Medicine (1995-99) の5年分を収録。

臨床上のいろいろな問題点を解決するための基礎的情報や、最善の臨床処置決定に必要なエビデンス (科学的根拠) を提供する。

*Windows & Mac



●年間購読価 (税別)	
¥ 25,000 (個人)	¥ 36,000 (団体)
¥ 68,000 (2-5 Network license)	
¥102,000 (6-10 Network license)	

★価格・内容は予告なく変更される場合があります。
価格に消費税は含まれておりません。

BMJ

nkd

日本総代理店 (株) 南江堂 洋書部
〒113-8410 東京都文京区本郷3-42-6 ☎(03) 3811-9957
E-mail: nkdyosho@nankodo.co.jp

2000年6月 通巻第397号 日本洋書協会 編集者 高橋 紘
☎103-0027 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室 ☎(03)3271-6901 FAX.(03)3271-6920
E-mail: jaip@maruzen.ne.jp

印刷所=藤本総合印刷株式会社